網倉ゼミ卒業論文：

「音楽プロデューサー小室哲哉のマーケティング戦略」

Ａ９６－４２１３１　　小野龍生

～目次－ＣＯＮＴＥＮＴＳ～

第１章：「プロデューサーとは何か？」　－Ｐ１－
第２章：「１９９０年代を代表するプロデューサー」　－Ｐ１－
第３章：「小室哲哉の軌跡」　－Ｐ２－
第４章：「本当に国内Ｎｏ．１なのか！？
～他の有名プロデューサーとの比較～」　－Ｐ８－
第５章：「小室哲哉のマーケティング戦略
～なぜここまで成功したのか？～」　－Ｐ１０－
第６章：「仮説その１～流行取り入れ戦略～」　－Ｐ１１－
第７章：「仮説その２～女性主体戦略～」　－Ｐ１２－
第８章：「仮説その３～メディア戦略～」　－Ｐ１３－
第９章：「小室哲哉の戦略に入れなかった者～ＴＫの失敗！？～」　－Ｐ１４－
第１０章：「落ち目の小室哲哉！？
～今後の小室哲哉のプロデューサー活動～」　－Ｐ１５－

第１章：「プロデューサーとは何か？」

日本の音楽業界・音楽シーンは常に変貌を遂げている。しかしその音楽業界・音楽シーンにおいて「プロデューサー」とはかならず存在しており、不可欠な存在でもあるのだ。「プロデューサー」とは「製作者・演出者」を意味しており、音楽業界においては「音楽を制作・演出する者」にあたる。音楽シーンを振り返るとそこにはかならず「プロデューサーの影響」が見かけられた。「プロデューサー」は常に音楽やアーティストたちを影で支えるポジションにあたる。曲が売れる条件としてはそのアーティストの魅力は当然ながら問われるが、またその曲がどのようにプロデュースされ、どれだけ曲の魅力が引き出されているかが重要なのである。そのためにも「プロデューサー」とは重要な役割を課されており、音楽を支えるているのである。

第２章：「１９９０年代を代表するプロデューサー」

日本の音楽業界では「プロデューサー」という職業は影に潜めいていた。「何とか賞」をもらうのは大抵が歌手に作詞家そして作曲家であり、「プロデューサー」は常に裏方に撤していたのである。またその存在を気にとめるリスナーも当時はいなかった。だが１９９０年代からは日本の音楽シーンには「プロデューサー」という存在は一段と重要なものとなっている。そしてそれまでは特に表舞台にでることはなかったプロデューサーも９０年代になると有名になり、そのプロデューサーの名前も露呈され始めている。また９０年代に入って、それまではミュージック・アーティストであった者も自己の持つ音楽感性をより高めるため、あるいは別の形で自分の音楽感性を表現するためにプロデューサーに転向をするミュージシャンが増え始めてきた（悪い見方でとらえてしまうと「お金儲けのための手段」として転向する者もいるかもしれないが)。そのなかでも特に注目を集めた人物が『小室哲哉』という存在である。彼は９０年代に入り、それまで結成していたバンド（音楽グループのことである）を活動させながら次第にプロデユーサーの道を歩み始めたアーティストである。彼はそれまでバンドで「シンセサイザー」というハイテクなキーボード楽器を担当しており、自分の持つ能力を別の形で表現・向上させるため、それまでなかった日本の音楽シーンに新たなる「音」を取り入れるため、そして何よりも自身がやりたい音楽を実現させるためにプロデューサー業に身を転じたのである。そして現在国内で彼の名前・存在を知らないものはほとんどいないであろう。彼は「プロデューサー」としてかなりの栄光を掴み取ってきた人物である。彼こそは日本の音楽シーンをことごとく塗り替えてきた「敏腕プロデューサー」なのである。その彼は一体どのようにプロデューサーとして栄光を掴み取ってきたのであろうか。小室哲哉の「プロデューサー」としてのサクセスは一体どのようなマーケティング戦略によって得られたのであろうか。それをこれから検証していきたいと思う。

第３章：「小室哲哉の軌跡」

～その１／アーティストへの道～

まず最初に小室哲哉とはどのような人物かを説明しなければならないため、彼の軌跡を振り返ることにしよう。彼は１９５８年１１月２７日生まれの東京都出身である。３歳の頃より母親の勧めでバイオリンを始め、東京芸術大学教授のレッスンを受ける。６歳の頃にそれまで住んでいた柏市から東京都府中市に転移することになるが、新しい環境でもバイオリンのレッスンは受けていた。この当時に音感のベースが形成されたと見られる。小学５年生の頃に母親がエレクトーンを購入したことにより、初めて鍵盤楽器と接触する。１９７０年に大阪万博で行なわれた、富田勲が指揮する「マルチスクリーン＋１２チャンネルステレオ」を駆使した演奏に大きな衝撃を受け、この出来事により後にシンセサイザーへの興味につながった。その２年後に自らの持つエレクトーンを友人に売って、初めてシンセサイザーを手にしたのである。高校に入学するとプログレッシブ・ロックのレコードを聴き始めるようになる。特に彼は「レッドツェッペリン」や「キングクリムゾン」、「Ｔ－レックス」などを聴いていた。１９７７年に早稲田大学に入学し、三多摩地区の仲間たちとのコンサート活動に明け暮れていた。１９歳の頃に三鷹市にあるフィルキア楽器店主催のコンサートで、当時は「第一期スピードウェイ」というバンドを組んでいた木根尚登、宇都宮隆そして青木高貴らと出会う。そして１９８３年に宇都宮隆をボーカルに、木根尚登をギターに、青木高貴をマネージャーに、そして彼自身はキーボードとして初めて『ＴＭ　ＮＥＴＷＯＲＫ』が結成されたのである。彼らは『ＴＭ　ＮＥＴＷＯＲＫ』を結成した翌年に「金曜日のライオン」という曲でデビューを飾った。彼らはコンピュータを駆使した画期的なサウンドで音楽シーンを席巻させ始めたのである。

～その２／アーティストからプロデューサーへ・・・～

小室哲哉は１９８５年に初めてのソロワークとして「吸血鬼ハンターＤ」というアニメのサウンドトラック（以下サントラ）を制作することになる。またその年には作曲家としてアーティストへの楽曲の提供を始めることになり、１９８６年にリリースされた渡辺美里の「Ｍｙ　Ｒｅｖｏｌｕｔｉｏｎ」が大ヒットし、そこで人気コンポーザーの地位を築く。１９８７年にリリースされた７枚目となるシングルＣＤ「Ｇｅｔ　Ｗｉｌｄ」はシングルチャートで１位を獲得し、それをきっかけに『ＴＭ　ＮＥＴＷＯＲＫ』は快進撃を続けることになる。また同じ年に小室哲哉は角川映画「ぼくらの７日間戦争」のサントラを手掛けることになり、映画と共にそのサントラは大ヒットしたのである。そしてその２年後には今度は自分自身の初のソロシングル「Ｒｕｎｎｉｎｇ　ｔｏ　Ｈｏｒｉｚｏｎ」をリリースし、このシングルとセカンドシングル「Ｇｒａｖｉｔｙ　ｏｆ　Ｌｏｖｅ」が連続初登場１位を記録し、またその年の１２月にリリースされたソロアルバム「Digitalian is eating breakfast」は６５万枚という、当時ではかなり

の売上げを記録した。

彼は１９９０年に入ると彼のその質の高い楽曲の提供が評価され、今度は角川映画の「天と地」の音楽監督を担当することになる。また同じ頃に彼のバンドである『ＴＭ　ＮＥＴＷＯＲＫ』は『ＴＭＮ』とリネームされ、新たなプロジェクトとして音楽活動の領域を拡大していくことになる。１９９１年には彼自身のソロワークをさらに充実させ、「Ｘ」（後に「Ｘ－ＪＡＰＡＮ」として知られ、１９９６年に解散することになった日本を代表したロックバンド）のドラムとピアノを担当していたＹＯＳＨＩＫＩと共に『Ｖ２』を結成したことが話題になる。またその年は宮沢りえ、小泉今日子、中山美穂、観月ありさ、中森明菜、牧瀬里穂などの有名人たちをプロデユースし、楽曲を提供した。彼はこの頃から本格的にプロデューサーとしての新たなる道を歩み始めることになる。

～その３／本格的なプロデューサー活動の始まり～

小室哲哉の本格的なプロデューサー活動はここから始まることになる。１９９２年には遂に『ｔｒｆ』という日本初のテクノ・レイヴユニットをフルプロデュースすることを発表した（TetsuyaKomuro Rave Factory の略)。翌年の２月に『ｔｒｆ』は「ＴＫ　ＲＡＶＥ　ＦＡＣＴＯＲＹ」というシングルでデビューを飾ることになる。その後は「ＥＺ ＤＯ ＤＡＮＣＥ」「愛がもう少し欲しいよ」「Silver and Gold dance」「寒い夜だから・・・」「survival dAnce～no no cry more～」などの曲が次々とヒットソングになっている。１９９４年には『ｔｒｆ』がアルバム「Ｗｏｒｌｄ Ｇｒｏｏｖｅ」で初のチャート１位を獲得してしまった。また同じ年にそれまで活動し続けていた『ＴＭＮ』はプロジェクトの終了を宣言し、５月１８日、１９日には東京ドームにて総売上６００億円のプロジェクトの幕を降ろすことになった。

『ＴＭＮ』を終了した後、小室哲哉はアニメ映画「ストリートファイターズ・㊍」の主題歌・挿入歌をまかされることになる。その時小室哲哉は篠原涼子をプロデュースし、『篠原涼子 with t.komuro』という名で「恋しさとせつなさと心強さと」というシングルＣＤをリリースし、２００万枚以上というダブルミリオンセラー（１００万枚以上のことをミリオンセラーと呼んでいる）を記録したのである。翌年にはバラエティー番組などで絶賛の人気を誇っている『ダウンタウン』というお笑い芸人コンビの一人である『浜田雅功』と共に『H Jungle with t』というプロジェクトを『ダウンタウン』が司会をしているフジテレビの音番組「ＨＥＹ！ＨＥＹ！ＨＥＹ！～ＭＵＳＩＣ ＣＨＡＭＰ」で結成することになる。『H Jungle with t』は「WOR WAR TONIGHT～時には起こせよムーヴメント」をリリースし、初登場１位を記録し、オリコン（毎週ＣＤやビデオなどのセールスを統計している）でも７週連続１位を記録し、ミリオンセラー（推定１９０万枚以上）を達成することになる。またこの年（１９９５年）は小室哲哉にとってものすごく忙しい時期となってしまう。『H Jungle with t』というプロジェクトから始まった

小室哲哉の９５年は、その後フジテレビ主催の「フジテレビＬＩＶＥ ＵＦＯ '９５」で日本人初のダンスミュージカル「月が地球にＫＩＳＳをする」の音楽をプロデュースすることになった。８月には「avex dance Matrix '９５ ＴＫ ＤＡＮＣＥ ＣＡＭＰ」でオーガナイザーをつとめ、６万人もの人を東京ベイサイドスクエアに動員する。またその頃小室哲哉自らも１ユニットとして参加している『ｇｌｏｂｅ』を始め、『ｔｒｆ』『華原朋美』『ＥＵＲＯＧＲＯＯＶＥ』『ｈｉｔｏｍｉ』『H．A．N．D.』『安室奈美恵』などのプロジェクトを抱え込み、プロデューサーやミュージシャンとして多彩な活動を展開することになる。またその年に行なわれたＴＢＳテレビ系「輝け！日本レコード大賞」では『ｔｒｆ』が出演し、「Overnight Sensation～時代はあなたに委ねてる～」という曲で大賞を受賞したり、ＮＨＫで毎年恒例となっている「紅白歌合戦」に『H Jungle with t』が出演し、この年の大ヒット曲でもある「WOW WAR TONIGHT～時には起こせよムーヴメント」を熱唱した。その頃「ダウンタウン」の二人は物凄い人気があったため、この年の「紅白歌合戦」での注目となった。そして「紅白歌合戦」終了すると今度はａｖｅｘ系列にもなっている六本木にあるディスコ「ＶＥＬＦＡＲＲＥ」に『ｇｌｏｂｅ』『ｔｒｆ』『H Jungle with t』など小室哲哉がプロデュースしているアーティストたちが集まり、「スーパーカウントダウン１９９５－１９９６」が開かれた。９５年は小室哲哉にとってはまさにプロデューサーとしての才能を開花させた年になった。だが１９９６年４月には『H Jungle with t』の最後の曲となる「ＦＲＩＥＮＤＳＨＩＰ」をリリースする。この曲は「ダウンタウン」であり、また『HJungle with t』のヴォーカルでもある『浜田雅功』自らが竜馬役として出演した日本テレビ系のドラマ「竜馬におまかせ！」の主題歌にもなった。ここでまた小室哲哉の一つのプロジェクトに終止符が打たれることになる。しかしそれでも小室哲哉のプロデューサーとしての快進撃は衰えをみせなかった。いや、むしろこれが小室哲哉のプロデューサーとしての始まりにしかすぎなかった。

～その４／プロデューサーとしての本領発揮！！～

年が明けてから、小室哲哉は音楽史上に残る記録を次々と打ち始めていくことになる。１９９６年元日には『ｇｌｏｂｅ』の４枚目のシングル「ＤＥＰＡＲＴＵＲＥＳ」が発売され、これまでに小室哲哉がプロデュースしてきたシングルでは２３０万枚以上という過去最高の売上げを記録した。

また９６年には日本の音楽史上で驚異的な出来事が起きることになる。４月に発売された『ｇｌｏｂｅ』のファーストアルバム「ｇｌｏｂｅ」は４６０万枚というとてつもない売上げを記録してしまったのである。これは当時の日本歴代第１位のセールスを記録したのである。そしてその後に発売された、小室哲哉がプロデュースしている『華原朋美』のファーストアルバムとなる「ＬＯＶＥ ＢＲＡＣＥ」も２７０万枚のセールスを記録し、さらには『安室奈美恵』の

ファーストアルバム（小室哲哉が彼女のプロデューサーになってから初めてリリースするアルバム）「ＳＷＥＥＴ １９ ＢＬＵＥＳ」は３７０万枚と、シングルだけではなく今度はアルバムのプロデュースでもそれぞれ記録的な数字と枚数を達成したのである。１９９６年はまさに小室哲哉独走の年だったといってもおかしくなかった。そしてその勢いはとどまることを知らなかったのである。

１９９７年の3月には「第１１回日本ゴールドディスク大賞」授賞式で『安室奈美恵』が邦楽部門のグランプリに輝き、『ｇｌｏｂｅ』がグランプリ・アルバム賞』を受賞することになった。１９９８年の3月には『ｇｌｏｂｅ』のアルバムの通算売上げが（ファーストアルバム「ｇｌｏｂｅ」、セカンドアルバム「ＦＡＣＥＳ ＰＬＡＣＥＳ」、そしてその月の３１日に発売された3枚目のアルバム「Ｌｏｖｅ Ａｇａｉｎ」を含む）わずか2年3作品で１０００万枚に達し、日本の音楽史上最短記録を樹立したのである。そしてその年の7月には国内の4大ドームでの公演を実施したりした。『ｇｌｏｂｅ』は１０月から４週連続でシングルをリリースすることになる。そして１０月２６日には「wanna Be A Dreammaker」「ＳａＹｏＮａＲａ」「ｓｗｅｅｔ ｈｅａｒｔ」「Perfume of love」の４曲が同時にトップ１０にチャートインするというオリコン史上初の記録を樹立したのである。また毎年年末に行なわれる「輝け！日本レコード大賞」において今度は『ｇｌｏｂｅ』がその年にシングルを４週連続で出した最初の曲でもある「wanna Be A Dream Maker」で最優秀賞を受賞することになる。

１９９９年にはテレビ東京系列のオーディション番組「ＡＳＡＹＡＮ」から見事デビューを果たした『鈴木あみ』がファーストアルバムをリリースし、これまたミリオンセラーになる（推定約１８０万枚以上）。そして『ｇｌｏｂｅ』が今度はベストアルバム「ＣＲＵＩＳＥ ＲＥＣＯＲＤ １９９５－２０００」をリリースし、これまたダブルミリオンセラーを記録する（推定約２５０万枚以上）。

また１９９６年には新たなるレーベル「ＯＲＵＭＯＫ ＲＥＣＯＲＤ」を立ち上げている。そして１９９９年の2月には小室哲哉の新しいレーベル「ＴＲＵＥ ＫｉＳＳ ＤｉＳＣ」を立ち上げたのである。そこには『鈴木あみ』『Ｒｉｎｇ』『ＴＲＵＥ ＫｉＳＳ ＤＥＳＴｉＮＡＴｉＯＮ』そして5年ぶりに再結成された『ＴＭ ＮＥＴＷＯＲＫ』などのソニー系アーティストたちが集められ、本格的な小室哲哉自身のレーベルとして注目を集め始めている。

もはやプロデューサー業界において国内では小室哲哉はトップの地位を築き上げてしまったのである。もはや国内でその名を知らないものはいないであろう。それだけの存在感が今の小室哲哉にはあるのである。

～その５／多彩なプロデューサー活動：国内編～

小室哲哉の音楽プロデューサーとしての快進撃はまだまだ続き、またそのプロデューサー活

動は音楽のみならず別な方面でもその多彩な才能を魅せ始める。１９９５年にはフジテレビ系列の音楽番組「ＴＫ ＭＵＳＩＣ ＣＬＡＭＰ」の司会を務めていた（１９９８年に放送終了)。１９９６年1月１９日、２０日には今度は幕張メッセで久しぶりとなるソロのライヴ・パフォーマンス「ｔｋ－ｔｒａｐ」を開催する。この時だけのためのスペシャルユニットを結成し、最先端の音と映像・照明技術を駆使し、新たな感覚のライヴが行なわれた。今度はマガジンハウスが出版している「ポパイ」において、各界の著名人たちを迎えて対談を行ないその内容を掲載する「小室哲哉のネットパラダイス」の連載を開始する。またＴＢＣ東京ビューティセンターの主催する「'９６ the レディプロデュース・キャンペーン」をプロデュースすることになる。そのコンテストでの優勝者をデビューさせる企画から今度は『大賀埜々』が誕生したのである。9月には岐阜で開催された「マルチメディア国際会議」に小室哲哉が出席し、そこでマルチメディア・ネットワークに関する公演を行なう。１１月にはＮＴＴが発表した「こねっと・プラン」に小室哲哉が参加することが決定になり、また同じ月には厚生省の開催する「麻薬・覚醒剤禍撲滅運動」の一環として小室哲哉プロデュースによるライヴ「イエス・トゥー・ライフ dance alive」が実施される。そして今度はかつての『TMN』時代のメンバー、木根尚登や宇都宮隆たちの楽曲をプロデュースしたことにより、メディアも「TMN復活説」を立てたりしてしまう（実際１９９９年に『TMN』は再び『TM ＮＥＴWORＫ』として再始動し始めることになる)。また「円谷プロダクション」の娘である『円谷憂子』や『中森明菜』を再度プロデュースするなど、活動範囲をさらにひろげている。その他でもソニーのプレイステーションが発売したゲームソフト「カボールスクリーン」をプロデュースしたり、「１９９６年ベスト・ドレッサー賞」を受賞したりしている。

１９９７年の１月には今度は小室哲哉がプロデュースしている『安室奈美恵』のゲームソフトがセガサターンより発売されることになる。また４月からはフジテレビ系列にて小室哲哉がフィーチャーされた番組「ＫＯＭＵ@ＣＯＭ」の放送がスタートする（小室哲哉関連の情報をオンタイムに発信していくという内容である)。さらに１９９７年の１０月には小室哲哉がパーソナリティを務めるラジオ番組「ｋｏｍ ｓａｔ ｒａｄｉｏ」がスタートさせた（小室哲哉が音楽をテーマにトークを進めながらリスナーのハガキ、ファックス、ｅｍａｉｌに答えていくという内容である)。そして１９９８年の１１月には小室哲哉とファンをダイレクトに結びつける、全く新しいかたちのコミュニティサークルとなる、小室哲哉オフィシャルメンバー組織「ＴＫ ＪＥＴ ＬＩＮＫ」を設立する。そして１９９９年には、今では世界的に有名となった東宝アニメ映画「幻のポケモン－ルギア誕生」のエンディングテーマ曲を引き受けることになった（歌手は『安室奈美恵』、歌は「ｔｏｉ ｅｔ ｍｏｉ」である)。

このように小室哲哉は国内でも音楽以外の多彩なプロデューサー活動を行なってきたのである。そしてその活動は海外にも進出し始めたのである。

～その６／多彩なプロデューサー活動：海外編～

小室哲哉の多彩な活動はもはや国内だけにはとどまらず、海外にも進出し始めた。１９９６年１２月にはロサンゼルスに「ＴＫ ＮＥＷＳ」を設立し、アジア各国をはじめ、ワールドワイドな活動を展開すると発表。その後ニューズ・コーポレーションと「ＴＫ ＮＥＷＳ」において、台湾を中心にアジアからスターを発掘するオーディション番組「ＴＫ ＮＥＷＳ－小室魔力」が始まり、小室哲哉はその番組の監修をつとめることになる。そして翌年その番組から選ばれた『Ｒｉｎｇ』という女の子をプロデュースし、日本と台湾でのＣＤリリースが行なわれた。またその年の６月には再びアジアから『ＧＲＡＣＥ』というアーティストが香港で発掘され、プロデュースすることになる。『ＧＲＡＣＥ』のＣＤのリリースは香港のみとなってしまったが、その曲は『天方直実』というアーティストによってカバーされ、日本でもリリースされることになった。

１９９７年には２０世紀フォックス配給映画「ＳＰＥＥＤ２」のテーマ曲を手掛けることになる。またこの年の５月には小室哲哉は台湾において初の海外ライヴとなる「ＴＫ ＰＡＮ－ＰＡＣＩＦＩＣ ＴＯＵＲ’９７ ＩＮ ＴＡＩＰＥＩ」を開催する。それにはもはや国内では有名アーティストとなっている『安室奈美恵』『ｇｌｏｂｅ』『ｔｒｆ』が出演し、会場となったサッカースタジアムに約４万人もの観衆を収容したのである。さらにこの年には中日邦校正常化２５周年記念の一環として小室哲哉の初の中国ライヴ公演「ＴＫ Presents ＧＲＯＯＶＥ ＭＵＳＥＵＭ」が決定する。１１月１４日の北京から始め、上海、そして香港においてコンサートを開催する。１２月には１９９８年ワールドカップ・サッカー・フランス大会の公式アルバム収録曲をフランスのキーボード奏者『ジャン・ミシェル・ジャール氏』と共作で担当することも決まったのである。そして翌年の４月にはＦＩＦＡワールドカップ・サッカー・フランス大会の公式テーマソング「ＴＯＧＥＴＨＥＲ ＮＯＷ」を発表する。ヴォーカルには日本で『Ｄ＆Ｄ』という３人組のグループに所属していた『オリビア・ラフキン』という女性が抜擢されたのである。

７月に入ると小室哲哉の活動はさらに忙しさを増したのである。７月１日には香港で行なわれた中国変換１周年式典記念に音楽親善大使として小室哲哉が招待され、同式典で『ｇｌｏｂｅ』『ＧＲＡＣＥ』『Ｏｌｉｖｉａ』と共に楽曲を演奏する。また今度はグアム政府観光局による「グアム大夏祭」のプロモーションとして「グアム・アートイルミネーション」を総合プロデュース。７月４日にテレビ東京系列のオーディション番組「ＡＳＡＹＡＮ」から選ばれた『鈴木あみ』が同観光局を歌うことになり、小室哲哉と共にイルミネーションの点灯式典に出席することになる。また同じ日にグアム最大のエンターテイメント施設でもある「サンドキャッスル」にて『ｇｌｏｂｅ』のプライベート・アコースティックコンサートが実施された。１４日

にはパリ祭メインイベント「ＲＥＮＤＥＺ－ＶＯＵＳ’９８ ＥＬＥＣＴＲＯＮＩＣ ＮＩＧＨＴ」を『ジャン・ミシェル・ジャール氏』らと共にエッフェル塔前のシャン・デ・マルス公園にて開催する（またこの模様はインターネットでストリーム放送された）。そして９月３日にはＳＥＩＫＯとの共同開発による小室哲哉プロデュースのリストウォッチ「ＳＥＩＫＯ Ｆｒｅｑｕｅｎｃｙ」の発表が行なわれた。もはや小室哲哉は国内だけではなく海外にもその名を轟かせ、国際的にも有名人となってしまったのである。

第４章：「本当に国内Ｎｏ．１なのか？～他の有名プロデューサとの比較～」

このように小室哲哉の経歴を振り返ってみてみると、たしかに「敏腕プロデューサー」「一流プロデューサー」としてとらえることができる。しかし国内にはその他にも様々な有名プロデューサーたちが存在している。『スピード』を手掛けているソニー・ミュージック・エンターテイメント（ＳＭＥ）所属の『伊地知プロデューサー』や『Mr. Children』や『My Little Lover』らを手掛けているやトイズファクトリー所属の『小林武史』、そして最近売り出し中の『モーニング娘』『太陽とシスコムーン』らを手掛けている『つんくプロデューサー』などの大物プロデューサーたちがいる（その他にも奥田民生、佐久間正英、角松敏毅、浅倉大介、河村隆一などといった有名なプロデューサーたちはたくさんいるのだが、全員を検討していくと切りがないため種類の異なったプロデューサーを勝手にセレクトさせていただく）。そのような大物プロデューサーたちの存在がある中、小室哲哉は果たしてＮｏ．１の地位を確保しているのであろうか。

ではまず『伊地知プロデューサー』という「露出度の低いプロデューサー・タイプ」から検討していくとしよう。彼は『スピード』という大物アーティストを手掛けてはいる。しかし実際にアーティストは有名になっても、その売上げは小室哲哉が手掛けているアーティストたちと比較すると実は大したことではないのである。だがそれでも『伊地知プロデューサー』のプロデューサーとしての腕はたしかなのである。それでも問題は生じてくる。『伊地知プロデューサー』が手掛けているアーティストたちは全員がフル・プロデュースされてるわけではない（プロデューサーに全権を握られているわけではないため、自分たちの意見も多少は通るのである）。そのためアーティストたちはきまぐれで「休止活動」や「解散」などの問題も生じてしまう。実際『伊地知プロデュース』のＮｏ．１アーティストであった『スピード』も２０００年の３月には解散することになっている。そうなるとＳＭＥの業績もそこそこ下がることになり、何よりも『伊地知プロデューサー』のメインであったプロジェクトの一つが終了を告げることになってしまうのである。彼の名前は小室哲哉ほど世間に認知はされていない。実際町で「国内で有名または知っているプロデューサーの名前」というアンケートを５０人以上からとってみた。すると半分近くが『小室哲哉』と答えている（５４人中２５人）。実は『伊地知プロデュー

サー』と答えた人は２人しかいなかったのである。彼が新たに新人をプロデュースすることになっても、よほどの戦略を立てないかぎり、世間から受け入れてもらうことはたやすくはならないであろう。

次は『小林武史プロデューサー』という「自らもユニットとして参加するプロデューサー・タイプ」である。彼の場合ははっきりいって手掛けているアーティストが少なすぎるのである。自身が自ら参加している『My Little Lover』も最初の頃はかなりの話題を呼んでいたが、彼が途中から加わったことによりその人気と売上げは急降下してしまった。そして今ではそのグループは活動を見合わせる結果となっている。また国内でも大人気のグループ『Mr. Children』に至っては『小林武史』はフル・プロデュースしているわけではなく、また全ての曲を手掛けているわけでもない。時には編曲したりもするが、『Mr. Children』のその大半の作詞・作曲・編曲はヴォーカルの『桜井和寿』が手掛けている、いわばセルフ・プロデュースの形の方が多いのである（ちなみにアンケートでは５４人中３人であった)。小室哲哉の場合は自らが参加しているユニット『ｇｌｏｂｅ』は見事成功を収め続けてきた。だが『小林武史』の場合は自らが参加することによってそのブランドを下げてしまっている。しかもそのグループは活動を再開する気配も見せない。もはや『Mr. Children』オンリーになってしまった『小林武史プロデューサー』は最近では「本当にプロデューサーなのかと」と言いたくなるくらい怪しい存在に思えてくる。それほど『小林武史』のプロデューサー活動は今では目立っていないのである。

最後に『つんくプロデューサー』という「アーティスト兼プロデューサー・タイプ」である。彼の手掛けている『モーニング娘』は今ではかなりの人気を得ており、シングルをリリースする度にオリコンチャートの上位にかならず入ってくるほどの実力を身につけている。最近ではその『モーニング娘』から生まれた小さなユニット『プッチモニ』でさえオリコン初登場１位を記録している。また『つんくプロデューサー』が手掛けるもう一つのプロジェクト『太陽とシスコムーン』の名前も世間では認知され始めてきている。この『つんくプロデューサー』のマーケティング戦略は小室哲哉が行なったものと同じなのである。以前小室哲哉はテレビ東京系列オーディション番組「ＡＳＡＹＡＮ」に出演しており（実は今でも出演しているらしい)『ｄｏｓ』『鈴木あみ』らを発掘している（ちなみに『ｄｏｓ』はもう解散している)。またプロジェクトの大半は女性アーティストでもある。『つんくプロデューサー』もまた、このような女子高生向けの番組を利用し、女性をプロジェクトに起用することによって手掛けるプロジェクトの話題性や認知度を確保しているのである。実際アンケートでも５４人中１６人は『つんくプロデューサー』の名前を上げている。それならば『つんくプロデューサー』も小室哲哉と同等か、というとそうではない。たしかに『モーニング娘』は世間からの認知度は高いがそのセールスはまだまだ及ばないものがある。『モーニング娘』は過去に２回ほどミリオンセラーを記録しているが（「抱いて～Hold on me」と「ＬＯＶＥマシーン」の２作)、その数字は小室哲哉が

築き上げてきたものと比べるとかなりの差が生じてくる。また『つんくプロデューサー』は最近売り出したため、さほどの実績は持っていない。また実際小室哲哉ほどのプロジェクトは抱えておらず、『モーニング娘』以外はさほど売れていないがため、業績も今一つである。

このように比較していくとやはりプロデューサー業では小室哲哉が一歩リードしていることがわかる。

第５章：「小室哲哉のマーケティング戦略～なぜここまで成功したのか？～」

第３章を読んでいただくと分かる通り、小室哲哉はもはや国内ではその名を知らない人はいないくらいの一流プロデューサーとなっている。多少の失敗はあったとしても、その業績を振り返ると、総合的にはやはり「成功している」としか言いようがない。まさに９０年代は小室哲哉の独走状態でもあったのかもしれない。そんな小室哲哉がアーティストたちをプロデュースし、音楽マーケットに売り込むにあたって、一体どのような戦略を行なってきたのであろうか。

そもそも小室哲哉の名前はプロデューサー活動を始める前から『ＴＭ ＮＥＴＷＯＲＫ』の一員として知れ渡っていた。しかしその『ＴＭ ＮＥＴＷＯＲＫ』ですら、『安室奈美恵』『ｇｌｏｂｅ』『ｔｒｆ』などのようにミリオンセラーを樹立したことはない。そのため１９９２年に『ｔｒｆ』最初にフル・プロデュースした時もその名はあまり知れ渡らなかった。だがあるきっかけにより、『ｔｒｆ』は一気にブレイクすることになる。また『ｇｌｏｂｅ』『華原朋美』『安室奈美恵』『鈴木あみ』といったアーティストたちも次々と違う形ではあるが、ミリオンセラー・アーティストになっている。この「現象」は一体なぜ起きたのであろうか。ただ単に小室哲哉が有名でかっこいいプロデューサーといった理由からではないであろう。小室哲哉プロデューサーは、そして小室哲哉のマーケティング戦略はなぜ成功を成し遂げたのか。そこで次の章でいくつか仮説を立てて検討していくことにしよう。

第６章：「仮説その１～流行取り入れ戦略～」

まずは「流行取り入れ戦略仮説」である。これは小室哲哉が若者の間での流行をどのように取り入れてきてプロデュースしたか、またどのような流行を生んだか、という戦略である。果たしてこの戦略は小室哲哉の成功につながっているのであろうか。

小室哲哉はプロデューサー活動を始めてから常に周囲を気にしながら行なってきた。『ｔｒｆ』を手掛けていた時、丁度その頃「カラオケ」や「ジュリアナ」などが日本国内で話題を呼んでいた。小室哲哉はそこに注目点を置き「ＥＺ ＤＯ ＤＡＮＣＥ」という曲を作り、『ｔｒｆ』にその曲を授けたのである。その曲は「カラオケではしゃいで楽しめる」「ディスコでもノリノリの曲」など若者たちの間でいろいろと話題性を集め始めたのである。当時はまだ「ＥＵＲＯ

ＢＥＡＴ」という音楽種が日本にはなかった。そこで小室哲哉は日本人にも受け入れられる「ユーロビート」を取り入れ始めたのである。また『ｔｒｆ』は「歌って踊れるグループ」としてその名が知れ渡り、そして活動することになる。その「歌って踊れる」アーティストというのは当時はほとんどいなかったため、『ｔｒｆ』の存在は常に新鮮さを失わなかった。そしてその後１９９４年から１９９５年にかけてリリースされたシングルＣＤ「survival dAnce～no no cry more」を筆頭に、「Ｂｏｙ Ｍｅｅｔｓ Ｇｉｒｌ」「ＣＲＡＺＹ ＧＯＮＮＡ ＣＲＡＺＹ」「masquerade」そして「OVERNIGHT SENSATION～時代はあなたに委ねて」などはまさにメガ・ヒットとなったのである。

『ｔｒｆ』のアーティストとしての地位が安定してきたため、１９９５年に入って今度は沖縄の「アクターズ・スクール」からの出身の『安室奈美恵』も『安室奈美恵 with Super Monkey's』として「ＴＲＹ ＭＥ～私を信じて」で一気にブレイクし始める。彼女もまた「歌って踊れる」アーティストなのである。この頃から若い女性たちの間で『安室奈美恵』のファッション（茶髪にミニスカートとロングブーツそしてロングコート）を真似することが流行となった。「歌って踊れる」アーティストの『安室奈美恵』は若い女性たちから圧倒的な支持を得て、彼女のファッションを真似する女性たちのことを「アムラー」とまで呼ばれるようになったのである。ここでもまた小室哲哉はいち早くそこに目をつけて、『安室奈美恵』をプロデュースすることを決定する。小室哲哉が『安室奈美恵』をプロデュースすることにより、彼女の名前はさらに広まった。そして翌年にリリースされたシングル「Ｄｏｎ’ｔ ｗａｎｎａ ｃｒｙ」は見事ミリオンセラーとなったのである。『安室奈美恵』の存在は女子高生の間ではもはやカリスマ的存在となっていた。彼女がメイクを変えれば他の女子高生も変え、彼女が新たなファッションを取り入れれば他もそうする、といった現象がしばらく続いたのであった。実際『安室奈美恵』は１９９６年の「ベスト・ドレッサー賞」を受賞しているのである。それほどまでに彼女の存在は流行ったのである。

小室哲哉が『安室奈美恵』をプロデュースし始めた頃、同じ時に『華原朋美』のプロデュースも手掛けていた。『華原朋美』は小室哲哉プロデュースとしては『安室奈美恵』よりも一足先にデビューを飾っていた。しかし最初の頃はまだ無名であったため、周囲からは認知されなかった。実際にファーストシングルである「keep your self alive」はそれほどまでは売れなかった。しかし続いて１０月にリリースしたセカンドシングル「Ｉ ＢＥＬＩＩＥＶＥ」は最初は売上げこそ伸びはしなかったが、冬の季節が近づくにつれ、その数字は次第と伸び始めたのである。丁度その頃から『華原朋美』のメディアなどでの露出度が多くなり、その容姿は周囲から次第に受け入れられていった。そしてサードシングルとなる「Ｉ'ｍ ｐｒｏｕｄ」は大ブレイクし、見事ミリオンセラーとなった。またこの『華原朋美』というキャラクター（性格）は自分自身を「朋ちゃん」と呼ぶくらい可愛く魅せているため、周囲からの受け入れもよかった（逆に嫌

いな人も結構いたのだが)。１９９６年には『安室奈美恵』と『華原朋美』はそれぞれ流行の最先端となっていた。当時は本当に「安室奈美恵か華原朋美か」と言われていたくらいであった。ちなみにキャラクター商品である「キティーちゃん」が流行りだしたのも、そもそもは『華原朋美』がきっかけとなっている。

また１９９５年にはフジテレビ系列の音楽バラエティ番組「ＨＥＹ！ＨＥＹ！ＨＥＹ！～ＭＵＳＩＣ ＣＨＡＭＰ」の司会者の『浜田雅功』と『H Jungle with t』を結成して大ヒットを記録しているが、これも当時大人気（流行）であった『ダウンタウン』を小室哲哉がいち早く取り入れたことによって成功につながっているのである。

そして１９９８年はアーティストたちの間で「同時リリース」や「連続リリース」などが流行ってしまった。これはその年『ＧＬＡＹ』という人気ロックバンドがシングルＣＤを２枚同時に発売したことから始まった。彼らにつられて今度は『ラルク・アン・シエル』というロックバンドが前代未聞のシングル３枚同時リリースを成し遂げた。しかもいずれもかなりのセールスを記録している。そして小室哲哉も当然のごとく、今度はちょっと異なった「４週連続リリース」を行なったのである。この結果、全てがリリースされた後、４枚全てがオリコンチャート１０位以内に入るという記録を打ち立てたのである。

このように常に流行の最先端を取り入れたり、また流行を生み出す「流行取り入れ戦略」はプロデューサーとしての小室哲哉の成功に見事つながっていると思われる。

第７章：「仮説その２／女性主体戦略」

次のこの「女性主体戦略仮説」とは小室哲哉がプロデュースするアーティストたちのそのほとんどが「女性」であること、つまり女性を主体としてプロデューサー活動を行なっていることである。小室哲哉はプロデューサー活動を始めた頃「女性を中心に行なう」とも宣言している。テレビ東京系列オーディション番組「ＡＳＡＹＡＮ」は今でこそ「ＡＳＡＹＡＮ」となっているが、当時は「浅草橋ヤング洋品店」という情報バラエティ番組であり、そのワンコーナーとして小室哲哉の新人発掘コーナー「コムロギャルソン」（コム・デ・ギャルソンという女性の意をもった言葉をもじった）があったのだが、そこでも常に女性をターゲットにしていた。なぜ小室哲哉は男性アーティストには特に目もくれず、女性を主体にしてきたのか。そして女性を中心にプロデュースすることによって果たして成功はしたのであろうか。

もともと小室哲哉が女性を主体としたのは「曲が作りやすい」という理由からである。女性は男性よりも高い声を出すことが可能である。小室哲哉の曲の一つの魅力は曲のキーが高くなることである。これは他のアーティストたちにとっても至難であり、一般的にカラオケなどで歌うのは難しいとされているくらいである。リスナーたちはそこに魅力を感じてしまうのである。そしてその魅力は男性よりもむしろ女性たちに受け入れられているのである。なぜならば

カラオケを利用するのは女性の方が多いからである。９０年代に入りカラオケは若者たちにとっての娯楽になってしまっており、若者は遊びや飲み会の後にカラオケに行ってしまう習慣さえもついてしまっている。そんな女性たちがカラオケで求める歌は当然女性たちが歌える曲である。そのカラオケで歌を歌うためにはＣＤをレンタルするか購入することによって練習を積まなければならない。小室哲哉が目をつけたのはまさにそこである。カラオケの人気により女性は同性のアーティストを好むようになり始めた。また丁度その頃『安室奈美恵』が大ブレイクしたことによって、同性からの受け入れはさらに増していった。彼女の魅力は同性を虜にしていった。また同時に『華原朋美』も売れ始めて、同性からも圧倒的な支持を得ていた。

この「女性主体戦略仮説」を裏付ける話はもう一つある。『浜田雅功』とのユニット『H Jungle with t』はたしかに絶大な人気を誇っていた。しかしあれは一時的なプロジェクトにすぎなかった。また小室哲哉が手掛けていた『H．A．N．D.』というヒップホップグループがあった。しかしこれが全く話題にもならず、いつしか消え去っていった。当時ヒップホップもそれなりの話題性はあったのだが、やはり支持してくれるリスナーは少なすぎたのである。また『モーニング娘』『太陽とシスコムーン』『タンポポ』『プッチモニ』らをプロデュースしている『つんくプロデューサー』も『７ｈｏｕｓｅ』という男性バンドをプロデュースしたりしている。しかし結局『７ｈｏｕｓｅ』は話題性も集められず、セールスも今一つに終わっている。

実際女性アーティストの全てが同性に受け入れられるわけではない。しかし小室哲哉がこだわりをみせてきた「女性主体のプロジェクト」の大半は成功を収めており、ミリオンセラーになったものも数知れない。『ｔｒｆ』『安室奈美恵』『華原朋美』『ｇｌｏｂｅ』『鈴木あみ』がそうである。この「女性主体戦略」は一応小室哲哉の軌跡をたどってみるとすでに立証されているのではないか。

第８章：「仮説その３／メディア戦略」

この「メディア戦略」とは広告、ＣＭ、番組などを使ってアーティストたちを売り込む戦略である。「メディア戦略」はマーケティングを行なうためにはかならず必要な戦略である。もちろん音楽業界でもこの戦略はかならず利用されている。それならば小室哲哉は一体どのような「メディア戦略」によってアーティストたちをこの世に送り込み、成功を収めたのであろうか。

小室哲哉の名前は世間から前もって知られていた。丁度『ｔｒｆ』の「ＥＺ ＤＯ ＤＡＮＣＥ」がブレイクした頃、小室哲哉のプロデューサーとしての名前も認知され始めた。実際小室哲哉がプロデューサーとして本当に支持を得たのはフジテレビ系列の音楽バラエティ番組「ＨＥＹ！ＨＥＹ！ＨＥＹ！～ＭＵＳＩＣＣＨＡＭＰ」に出演するようになってからであろう。最初は自分がフルプロデュースをしている『ｔｒｆ』を売り込むため共に出演するが、今度は『H Jungle with t』を結成することにより、自分自身のプロデューサーとしての価値を高めていった。

そして小室哲哉は自分がプロデュースするアーティストたちを次々とテレビ番組（主に音楽番組）に出演させて、それぞれのアイデンティティを売り込ませた。この戦略は音楽業界では、行なって当然の戦略である。小室哲哉は当たり前のことをやってのけただけである。また自らが司会を務める音楽番組「ＴＫ ＭＵＳＩＣ ＣＬＡＭＰ」では自分がプロデュースを手掛けているアーティストたちをゲストとして招いたり、番組内で「ＴＯＷＥＲ ＲＥＣＯＲＤ」のＣＭをすることによって認知度を高めようとしたりもしていた（ＴＯＷＥＲ ＲＥＣＯＲＤは小室哲哉プロデュースのアーティストたちがキャンペーンを行なったりもしていた、小室哲哉との関連があった）。そしてテレビ東京系列のオーディション番組「ＡＳＡＹＡＮ」ではテレビの前にいる全国の歌手を夢見ている人たちに、「だれにでもチャンスはあるんだ」と思わせる。そして毎週小室哲哉の発言や動きが詳しく報告されるのだが、この時点で小室哲哉はかなりの注目を集めることに成功している。オーディションを受ける者はかならず小室哲哉プロデュースの歌を歌わなければならない。これでは嫌でも注目せざるをえない。実際この番組はどこまでが本当なのかは分からない（デキレースという噂もある）。

しかしそれだけでは終わらなかった。今度はＣＭのタイアップとして、小室哲哉プロデュースのアーティストの曲を使ってもらっている。中でも有名なのがＪＲ東日本「ＪＲ ski ski キャンペーン」のＣＭのタイアップとなった『ｇｌｏｂｅ』の曲でセールス２３０万枚以上を記録した「ＤＥＰＡＲＴＵＲＥＳ」であろう。またドラマの主題歌にも起用された曲で有名なのは、フジテレビ系列ドラマ「バージンロード」で起用された、『安室奈美恵』が歌う「Ｃａｎ Ｙｏｕ ＣＥＬＥＢＲＡＴＥ？」であろう（１９９７年年間オリコンチャート第１位）。小室哲哉がプロデューサー活動を始めるようになって、彼の楽曲のほとんどがドラマの主題歌・挿入歌やＣＭソングなどに使われることが多かった。ちなみに『ｇｌｏｂｅ』が今までリリースしてきたシングルのほとんどがＣＭかドラマのタイアップとなっている。

このような「メディア戦略」を小室哲哉は行なってきたわけだが、やはり一つ一つの手段にはそれぞれインパクトがある。しかもちゃんとリスナーたちをとらえているのであるから、やはりこの戦略も成功の一つの要因だったのであろう。

第９章：「小室哲哉の戦略に入れなかった者～ＴＫの失敗！？～」

このように読んでいくと小室哲哉のプロデューサー活動は全てが成功しているように思われるが、実はそうではない。やはり成功に失敗はかならずつきものである。『安室奈美恵』『ｇｌｏｂｅ』『ｔｒｆ』『華原朋美』『鈴木あみ』などは成功作だが、失敗作もやはりいくつかある。そのいくつかは前にも述べられている。『Ｈ．Ａ．Ｎ．Ｄ.』『円谷憂子』『大賀埜々』らは１、２曲だけリリースして消えてしまっている（実際はどうなっているかは分からないが）。『Ｈ．Ａ．Ｎ．Ｄ.』の方は小室哲哉自身が元々好きなタイプのジャンルではなかったため、あまりい

い曲を作れなかった。元々小室哲哉はその頃は「テクノ」を中心にプロデューサー活動を行なっていたため、その正反対のジャンルである「ヒップホップ」には手がつかなかったのである。『円谷憂子』の場合は小室哲哉が当時「円谷プロダクション」と仕事をする機会があり、そこで娘の『円谷憂子』をまかされたという説もある。デビューしたのは良かったが、結局周囲に認知してもらうことはなく、現在は活動を見合わせている形になっている。『大賀埜々』はデビューするタイミングが悪すぎた。彼女がデビューした時期は、丁度テレビ東京系列オーディション番組「ＡＳＡＹＡＮ」が盛んで、そちらの方に世間の注目がいっていたのである。当然周囲は『大賀埜々』が受けた、ＴＢＣ東京ビューティセンター主催の「’９６ the レディプロデュース・キャンペーン」については知る由もない（ごく一部の人しか知らなかった)。そのため周囲は『大賀埜々』の経歴、デビューするきっかけなどについては無知であり、またメディアに対する露出度も極端に少なかったため「誰それ？」といった感じで終わってしまったのである。

こうした小室哲哉プロデュースの失敗プロジェクトには理由がある。小室哲哉はそもそも「テクノ・ダンス・ミュージック」からそのプロデューサー活動を始めている。そして様々なプロジェクトを抱え込み始めてしまった。そのため『円谷憂子』や『大賀埜々』に対する音楽の方向性が見つけられず、また力もあまり入れられなかった。『H．A．N．D.』の音楽性に至ってはそもそも小室哲哉が少し興味を示した程度であり、実際には売れないという確信もあったため、力を注ぎこめなかったのである。実際自分の曲のイメージとアーティストのイメージが一致しないとそのアーティストの個性を引き出すことはできないのである。

そして一番目立った失敗はやはり「華原朋美騒動」であろう。小室哲哉は『華原朋美』とプライベートでも付き合っており､一時は結婚するのではないかとまで言われていた仲であった。しかし彼女はとてつもない個性の持ち主でもあり、テレビに出演してはかならず「爆弾発言」を言ってしまうほどのアーティストであった。たしかに小室哲哉プロデュースの中では成功の一つなのだが、人気が上昇すると共にマイナス面も次第にあらわれ始めてしまったのである。そしてそれは「小室ブランド」の名に傷をつける言動となってしまう。見切りをつけた小室哲哉はついにプロデュースを断念する（切り捨てたとも言えるのだが)。

これらのプロジェクトを「駄作」と呼ぶのはしのびないのだが、やはり小室哲哉が成功を収めたプロジェクトの影にはこのような失敗作があったからこその成功であると思われる。

第１０章：「落ち目の小室哲哉！？～今後の小室哲哉のプロデューサー活動～」

常に日本の長者番付に名を連ねていた小室哲哉の影響力は今現在低下し始めている。『華原朋美』の事件を筆頭に、他にも『安室奈美恵』が産休で一年間休養していたことも問題であった。彼女が音楽シーンから抜けたことにより、他の小室哲哉プロデュースのアーティストたちの活

躍も目立たなくなってしまった。それはそれまで中級ランクのアーティストたちが次第に上級に登りつめ、「小室ブランド」を圧倒し始めたのである。産休から復活した『安室奈美恵』もその後はリスナーたちに大した影響を与えることはできなかった。また『ｇｌｏｂｅ』には活動シーンが目立たなくなってしまっている。まだシングルを出せばオリコンチャート１０位以内には入り込んでくるのだが、セールスは前ほど爆発的ではなくなってしまった。『ｔｒｆ』に至っては「まだいるの？」と思われているほどになっている。それほどまでに露出度が低下してしまっているのである。そして今現在売り出し中の『ＴＲＵＥ　ＫｉＳＳ　ＤＥＳＴｉＮＡＴｉＯＮ』は実はまだオリコンチャート１位どころか１０位以内に入ったことすらないのである。

小室哲哉プロジェクトは後から現われた『宇多田ヒカル』『浜崎あゆみ』などに圧倒され始められている。たしかに総合的に見るとまだ小室哲哉のセールスポイントの方が圧倒的ではある。しかしこの先の存続について考えると、そううかうかとはしてはいられない。現在対抗できているプロジェクトは『鈴木あみ』だけであろう。

この原因は小室哲哉の戦略に問題が生じているからである。しかし日本の流行の波はとても分かりにくく、それは音楽シーンにとっても同じである。小室哲哉は「Ｒ＆Ｂ」（リズム・アンド・ブルースの略）という新たなサウンドを日本の音楽シーンに取り入れるため、『ＴＲＵＥ　ＫｉＳＳ　ＤＥＳＴｉＮＡＴｉＯＮ』のプロジェクトを発表したのだが、タイミングが早すぎたのである。その頃の日本ではまだ「Ｒ＆Ｂ」はほんのごく一部にしか知れていなかったためそう簡単に受け入れてはもらえなかった。そのため『ＴＲＵＥ　ＫｉＳＳ　ＤＥＳＴｉＮＡＴｉＯＮ』は今だによいセールスを記録することができないままでいる。その後現われた『宇多田ヒカル』によって「Ｒ＆Ｂ」は日本でも一気にブレイクすることになったのである。ちなみに『宇多田ヒカル』の存在は「口コミ」という、それまで小室哲哉のマーケティング戦略には存在しなかったところから現われている。

また小室哲哉は『ＴＭ　ＮＥＴＷＯＲＫ』を再結成することによって再建を試みているが、これもあまりうまくいっているとは言えない。たしかにかつてのファンは『ＴＭ　ＮＥＴＷＯＲＫ』の再結成を待ちわびていたのだが、いざとなると話題性もなく、特に誰も振り向いてはくれなかった。

全盛期は積極的に露出したり、常に流行を見切って新しいものを提供してきたことによって周囲に認知されたり、興味を湧かせたりしていたのである。だが自分自身の地位がある程度安定してしまったため、小室哲哉のプロデューサー戦略に影響力の低下がみられるようになってきている。今後小室哲哉がその地位を保持するためにはやはり過去の栄光を振り返り、自分の成功を見直し、マーケティング戦略を立て直す必要があるのではないか。そして流行の波を読み取り、新たな「モノ」を提供してくれることを願いたいと思う。